

荷葉山入(竹山集) 卷一



司馬遼太郎 竜馬がゆく 立志篇

文藝春秋

竜馬がゆく
立志篇



昭和三十八年七月十日 第一刷
昭和四十三年二月一日 第三十五刷

定価 四二〇円

著作者

し ば りょうたろう
司馬遼太郎

発行者

上林吾郎

発行所

株式会社
文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本

目 次

淫 蕩	二 十 歳	朱 行 燈	黒 船 来	千 葉 道 場	江 戸 へ	お 田 鶴 さ ま	門 出 の 花
123	95	78	63	48	32	22	7

寅の大変	160
悪弥太郎	193
江戸の夕映え	202
安政諸流試合	215
若者たち	244
旅と剣	266
京日記	305
風雲前夜	327

裝
幀
中
尾
進

竜馬がゆく

立志篇

門出の花

「小嬢さまよ」

と、源爺おやぢちゃんちゃんが、この日のあき、坂本家の三女の乙女おとめの部屋の前にはいつくばり、芝居もどきの神妙さで申しあげたものであった。

「なんです」

と、乙女がうつむいて答えた。手もとが針仕事でいそがしい。あすという日は、この屋敷の末っ子の竜馬りゅうまが、江戸へ剣術修業に旅立つ。

「えらいことじゃ。お屋敷の中庭のすみの若桜が、花をつけちよりまする」

「そんなの、わかっちゃよる……」

乙女は、障子のかげで笑った。

「またいつもの源おんちゃんおんちゃんの法螺はらじゃ。三月もなかばと
いうのに、また桜が咲くということが、どうしてありま
しうぞ」

「まこと、まこと」

どういう陽気のかげんか、源おんちゃんおんちゃんは、障子のむ
うでおどっているらしい。

「うそとお思いなら、出て見つかわされよ。たった一輪
じゃが、目のさめるごとくにバツと咲いちよりまする」

「ほんと？」

つられて、縁側へ出てみた。ひどく陽がまぶしかった。

なるほど、下枝のあたりに、クッキリとした白さで、一輪、
花が咲いていた。この桜の若木は、弟の竜馬りゅうまが九つとき、
いたずら半分に植えたものであった。ことしでちょうど十
年になる。

「これはほんとじゃ」

乙女は感心してみつめていたが、やがてなにに気づいた
のか、声をあげて笑いだした。

笑うと、とまらないたちなのである。いつか、播磨屋橋
を馬上で渡りかかったりっぱな武士が、橋のなかごろで馬
が放屁はなをすると、すぐそのあとと武士もたかだかと放屁はなした、
というはなしを源おんちゃんおんちゃんがもどつてきて話すと、乙女
は「うっ」といったきり、目が白くなった。やがて体を倒
し、乳をおさえ、白足袋の両足をたたみの上に浮かし、こ
ろげまわって笑いはじめた。謹厳な長兄の権平が本気で心

配して、

「これは、医者どのでも呼ばずんばなるまいかの」

と、いったほどのものだ。

乙女は、色白でちまちまと可愛い顔だちをしていたが、からだは、なみはずれて大きく、五尺八寸は優にあった。

ころげると、ずしりと畳がしなう。よくふとつてもいたから、兄の権平や姉の早苗がからかつて、

「お仁王様に似イちゅ」

といった。これがひろがって高知の城下では、

「坂本のお仁王様」といえば、百姓町人まで知らぬ者はない。そのうえ大きいわりには動作が機敏で、竹刀をつかわせれば、切紙ほどの腕はあった。末弟の竜馬に幼少のころ剣術の手ほどきをしたのは、この三つ年上の乙女である。

「源おんちゃん、つまらぬことをする。これは、紙ではありませぬか」

と、乙女は気づいた。わけをきくと、不器用の源おんちゃんはその紙の一輪をつくるために、ゆうべはひと晩かかったという。乙女はおかしくなったが、途中であわてて笑いをとめた。涙が出そうになったのであろう。

竜馬が、いよいよあす発つときいて、城下本町筋一丁目

の坂本屋敷には 朝からひっきりなしに、祝い客がつづいてゐる。

祝い客たちは、父の八平、嫡兄の権平にそれぞれお祝いを申しのべたあと、かならず末娘の乙女の部屋にもやってくる。言うことばも、きまつている。

「小嬢さまは坊さんがお発ちになったあとは、さぞさびしゅうござりましょう」

「なに、左様なことはありませぬ。涙たれが手もとにおりませぬと、さばさばいたしまする」

むろん、この娘らしい空いばりなのである。乙女は、竜馬の十二歳のとき母の幸子が死んでから、わずか三つ上ながら、弟をおぶったり、添い寝をしたりしてきょうまで育ててきた。竜馬に対しては、若い母のような気持でいたし、あるいはそれ以上だったかもしれない。それほど幼いころの竜馬は、手のかかった子なのである。

坂本家に三十年も出入りしている道具屋の阿弥陀仏などは、うまれつきこの土地でいう異骨相な老人で、ことばに遠慮がないから、

「よくぞまあ、あれほどまでにお育てなされました。申してはばかりあることながら、ここの坊さんはえらい寝小便たれでござりましたからのう」

事実なのである。

竜馬は、十二になつても寝小便をするくせがなおらず、近所のこどもたちから「坂本の寝小便よばあつたれ」とからかわれた。からかわれても竜馬は気が弱くて言いかえしもできず、すぐ泣いた。ときどき近所のこどもたちになまじつて、すぐ近所の築屋敷つぎの河原などであそぶことはあったが、たいていは泣かされて帰ってくる。それも屋敷までのあいだ二丁も三丁もべそべそと長泣きをしながらもどってくるために、城下ではたれでも、

「坂本の泣き虫」といえば「ああ、本町筋の洩垂れのことか」といった。竜馬は、どうしたことか、十二、三になつても、はなじるが垂れつばなしだった。十二のとき、ひとなみに父は学塾に入れた。城下では、藩の上士の子が上町の島崎七内塾にかよい、軽格の子弟は、おもに車瀬の池次作、大膳町の楠山庄助塾にかよつたが、竜馬が入塾したのは、この楠山塾である。

ところが、入塾するとほとんど毎日泣いて帰るし、文字を教えられても、竜馬のあたまでは容易におぼえられない様子なのである。ついに、ある雨の夜、師匠の楠山庄助がたずねてきて、

「あの子は、拙者には教えかねます。お手もとで教えな

されたほうが、よろしかろう」

見はなされたのである。もともと寺子屋の師匠といえはなれば世すぎで教えているのだが、その師匠からも見はなされたとなると、もはや家門の恥辱といつてよかつた。このときだけは父の八平も長嘆して、

「えらい子ができたものじゃ。この子は、ついに坂本家の廃れ者になるか」

兄の権平もにがい顔をしていたが、乙女だけはくすくすと笑い、

「いいえ、竜馬は左様な廃れ者にはなりません。ひよつとすると、土佐はおろか、日本に名をのこす者になるかも知れませぬ」

「寝小便をしてもかよ」

「はい」

乙女には、竜馬にかけているひとつの信仰があった。

竜馬は、うまれおちたときから、背中いちめんに旋毛がはえていた。父の八平は豪気な男だったからこれをおかしがり、

「この子はへんちくりんじゃ、馬でもないのにたてがみのはえちよる」

「といって、竜馬と名づけた。」

八平はよろこんだが、死んだ母の幸子はいやがり、

「猫かもしれないよ」

と心配した。幸子の記憶では、ちょうど懐妊したころ、可愛がつっていた雄猫が寝床を恋しがってしきりと幸子の腹のうえにのぼってきていたことをおもいだしたのである。

「なるほど、馬か猫か、これはあやういところじゃ。馬なら千里の駿馬しゅんばということばがある。猫ならどういふことばがあるかな。そうじゃ、泥棒猫どろぼうねこというのがある。竜馬は、どっちになるかい」

ところが長ずるにしたがつて、意外に愚童ぐどうだったために、竜馬の駿馬説は消えた。兄の権平も、

「やっぱり、猫じゃった。しかもあの愚鈍な様子では泥棒猫にさえなれそうにない」

しかし乙女は、そうはおもわなかった。寝小便よばちつたれのはなたれ小僧で、手習いもうろくにできない子だが、こどもにも骨柄こつがらというものがある。乙女の気のせいとか、見ているとどことなく茫洋とした味があるようにおもわれるのである。兄の権平にそれをいうと、大食いの権平はちょうど午後三時つまがひのかゆを食っていたときだったが、めしつづを噴きだして笑い、

「乙女の欲目じゃ。世間ではそういう者を茫洋といわず薄のろというちよる」

「でも、ほかのこどもとくらべると、どことなしに目の光りがちがいますよ」

「あいつは、父上ゆずりて近眼ちまゆなんじゃ。その証拠に、遠くをみるとき、シバシバと目を細めちよる」

「細めちよりますが、近眼ではありませぬ」

「近眼じゃ」

権平はそういうのだが、乙女には、竜馬が目を細めているとき、この少年だけがわかる未知の世界を遠望しているようにしかみえない。

乙女のほかに、もうひとりだけ竜馬の支持者がいた。ひょうきん者の源おんちゃんである。もっともこの老僕は乙女と竜馬のことなら、なんでも味方になるくせがあった。

「坊さんぼくさんは、きつとえらくなる。いまははなたれじゃが、大きゅうなればきつと日本一の剣術使いになれまする」

源おんちゃんのりくつは単純で、竜馬の左の腕に一寸ほどのあざがあるからいいのだという。このあざの持ち主が剣をまなべば天下に風雲をおこす、という相学を、どこかできいてきたらしい。

「たれからきいたの」

「お釈迦さまよりえらいお人から、ききましてござります」

「へーえ。そんなひと、お城下にいるかしら」

「帯屋町に、いてござりまする」

「なんだ、阿弥陀仏のおんちゃんか」

例の道具屋の老人である。この老人はもともと須崎屋吉兵衛というのが正称なのだが、隠居して阿弥陀仏と号していた。

しかし、ばかにはできない。

ひょっとすると阿弥陀仏のおんちゃんの予言があたるかもしれないと乙女がおもいはじめたのは、竜馬が十四歳のときからであった。——この少年は近所の築屋敷に小栗流の道場をもつ日根野弁治のもとに通いはじめてから、にわか顔つきまでかわってきただのである。

小栗流日根野弁治の道場は、浦戸にそそぐ潮江川（いまの鏡川）のそばにある。川むこうに真如寺山がみえ、城下でも景色のいい一角である。

日根野弁治は城下でも随一の達人で、和術にも達していた。もっともこの小栗流というのは、刀術のほかは、和術と拳法を加味したもので、稽古もひどく荒っぽい。この先生は、稽古のときなど打ちこみが軽いと、「それではイタ

チも斬れん」と弟子を叱った。

「こうやるんじゃ」

竹刀を上段にとり、ずしっと腰を沈め、同時に、ばんと相手の面を打つ。

「みたか。腰で斬る」

打たれる者はかなわなかった。面をつけているのに、衝撃が頭のシンまでくる。鼻の奥がきなくさくなり、目がくらんで倒れる者もいた。十四歳の竜馬も、ずいぶんやられたらしい。

入門後、ひとつきほどすると先生が竜馬の顔を、

「おんし、妙じゃぞ」

と気味わるそうにのぞきこんだ。理由は話さない。

竜馬は、毎日、剣術防具をかついで築屋敷から本町筋一丁目の屋敷にもどってくると、姉の乙女が待っている。

「庭へ出なさい」

これが日課だった。また、防具をつけねばならなかった。乙女は、武家娘らしい高島田に汗どめの白手拭を巻き、ふりそでをタスキでしぼり、木太刀一本をもったきりである。

「竜馬、おさらい。——」

今日ならつたとおりに打ちこめという。

「女と思って、みくびりなさるな」

みくびるどころではなかった。この風変わりな娘は、竜馬がいくら打ちこんでも、ばんばんと竹刀をはねあげてしまう。

何度か、庭の池へ突きおとされたことがあった。はいあがつてくるところを、乙女はすばやくつきとばしまた落す。ある日、父の八平がさすがに見かねて、

「乙女、よいかげんにせぬか」

としかると、

「ちがいます」

ふくれると、可愛い顔になる娘である。

「なにがちがうんじゃ」

「竜は雨や雲を得て昇天するといえますから、竜馬を水につけてみて、ほんとうの竜になるかどうかをためしているのです」

「ばか、わしは竜馬が可哀そうじゃというちよるんじゃない。そういうハツタカ（お転婆娘）では、お前さんの嫁入り口にさしつかえるというちよるんじゃ」

——それから三月ほどして道場の先生の日根野弁治が、以前とおなじように竜馬の顔をのぞきこんだ。

「やっぱり、妙じゃ」

のぞきこまれて竜馬がなんとなく不愛想な顔をしている

と、

「顔が、かわった。入門してきたときは、別の人間じゃ。物のたとえて、うまれかわったように、とよくいうが、やはりそういうことが世の中にあるものじゃな」

竜馬の顔は、別人のようにひきしまっている。背丈も、この春、十九歳になるまでの五年間に、五尺八寸にまでのびた。城下の街路を歩いていても、人が目をそばでてるほどの堂々たる偉丈夫である。

「あれが、坂本のはなたれか」

往来ですれちがう者のなかでは、自分の目を信じない者もいた。ただ乙女がみて、一つだけ幼いころの竜馬のくせが残っている所があった。よそにお招ばれに行っても、茶わんからめしつぶをぼろぼろとこぼすくせである。もっともこのくらいは兄の権平にもあったから、坂本家の血すじかもしれないと乙女は思い、あきらめてはいたが。

——竜馬はつよい、

という評判が城下にたったのは、この正月の日根野道場における大試合からである。乙女はこの日、真白の稽古着に紺のハカマをつけ、道場の末席で試合をみていたが、彼女でさえ（これが、弟のあの竜馬か）と目をみはったほど

だった。

竜馬は、はじめ三人の切紙と立ちあつてそれぞれ初太刀でしりぞけると、つぎに古参株の目録者ふたりの面と胴をとった。

試合の翌日、日根野弁治は、小栗流の目録をあたえた。わずかに十九歳である。このときで目録とは、日根野道場では異例だった。

「目録じゃと？ ああ、竜馬めが」

さわざだしたのは、兄の権平であつた。

「わしは、めくらじゃつた。名のとおり竜になるかもしれないわ。——な、父上」

と、八平に、

「すこし金がかかるが、江戸へ修業にやりましょう。ゆくゆくは城下で剣術道場をひらかせます。これは楽しみになつてきた」

さつそく八平と権平が日根野弁治のもとにとんでいって相談すると、

「御子息なら、剣でめしが食えます」

太鼓判をおしてくれ、そのうえ、

「寄らば大樹のかげ、と申す。やはり、大成するためには、大流儀を学ぶがよろしかろう。それには、北辰一刀流がよ

ろしい」

「ああ、千葉周作先生であられますな」

権平も田舎者ながら、それくらいのは知っている。

千葉の玄武館は、京橋アサリ河岸の桃井春蔵、麴町の斎藤弥九郎とならんで江戸の三大道場といわれ、天下の剣を三分していた。

「添書そへがきをかいて進ぜる。周作先生に学ぶのがいちばんよろしいが、先生はすでに老境であられるゆえ、京橋桶町に道場をもつ令弟の貞吉先生につかれるとよい。貞吉先生の道場は、お玉ヶ池の大千葉に対し、小千葉とよばれています」

「かたじけのうござる」

気のはやいふたりは、すぐその足で内堀のそばの家老福岡宮内の屋敷にゆき、

「お目通り願わしゅうござりまする。末子竜馬が儀でまかり越しましてござりまする」

坂本家は、城下では随一の金持郷士であつたが、身分は、家老福岡家御預郷士ごよけし、ということになっていた。竜馬を江戸にやるについては宮内の許しが必要だったし、あわせて藩庁への届けも、宮内を通じてとりはからっていた。数日して、藩庁から、

「剣術修業の儀、殊勝である」

という許可がおりた。この日、吉報をもって竜馬の部屋にかけこんだのは、乙女だった。

「竜馬、よろこびやれ。おゆるしがおりましたぞ」

「ははあ」

竜馬は、なさけない顔をしている。

「どうしたのです」

「そこにのみがいたんです。追っかけていると、文机の下に逃げこんでしまった。私も負けずにもぐりこむと、どうやらのが口のなかに入ってしまったらしい。あれは、妙な味ですな」

ぼんやり、笑っている。

（やっぱり、この子、人なみではないのかな）

いよいよ、竜馬が江戸へたつ日がきた。嘉永六年三月十七日である。

坂本家では、源おんちゃんが未明に門をひらき、桔梗の定紋をうった高張提灯をたかだかとかかげた。

屋敷うちの部屋々々にあかりがつき、父の八平が、紋服をきて書院へ出た。

「権平、竜馬はどこにいる」

といった。

「さきほどから見えませぬが」

「さがせ。あれは狐を馬に乗せたような男ゆえ、最後に入念な訓戒を垂れねばならぬ」

——そのころ竜馬は、姉に最後のあいさつをするため、乙女の部屋の障子をあげた。乙女も、それを待っていたのか、盛装ですわっている。竜馬は照れくさそうに、

「あいさつにまかり越しました」

「ご殊勝なことです」

ほめてやった。この竜馬は、どういうわけか、むかしから人にあいさつをするという簡単な動作ができない。作法とか、礼儀とかといった、人間が作った規律があたまから受けつけられないたらしいのである。もともと天性の愛敬があるから、人はたれも不快がらず、

——あれはぶすけじゃ。
で通っている。

竜馬は大きく両手をつき、だまっただま頭をさげていたが、やがてヒョイと顔をあげた。乙女はおどろき、

「どうしたのです」

「あいさつはやめた」

いきなり右足を出し、ふとももを両手でかかえて、

「乙女姉さん、足すもうをやろう。こどものときから二人